映画場面から「こころを読む」社会認知検査の日本語版を開発
―ASD・うつ病・一般成人の成績を比較―

概要

京都大学大学院医学研究科精神医学教室の大塚貞男 特定助教（研究当時、現：兵庫教育大学大学院学校教育研究科准教授）と村井俊哉 教授、浜松医科大学子どものこころの発達研究センターの川上澄香 特任助教、筑波大学人間系障害科学域の魚野翔太 准教授らの研究グループは、映画の一場面から登場人物の気持ちや意図を読み取る社会認知検査「映像からこころを読むテスト（RMF）」の日本語版を作成し、その心理検査としての妥当性や有用性を検証しました。

自閉スペクトラム症（ASD）のある成人、うつ病のある成人、一般成人を比較した結果、ASD 群の RMF 成績は、一般群およびうつ病群より有意に低いことがわかりました。また、動的な映像を通して、表情や視線、身振り、セリフ、声の調子、文脈など、多様な情報が提示される RMF は、静止画像のみを用いた従来の社会認知検査「目からこころを読むテスト」では捉えきれない社会認知の特徴について、補完的な情報を提供することが示されました。今後、さまざまな神経発達症や精神疾患にみられる社会生活上の困難の背景を明らかにし、一人ひとりの特徴に応じた支援につながることが期待されます。

本研究成果は、2026 年 10 月 19 日に国際学術誌 *Autism Research* にオンライン掲載されました。



映像からこころを読むテスト（RMF）のイメージ図：RMF と従来の社会認知検査との違いを示しています。図中の画像や選択肢は説明用の例であり、実際の検査刺激ではありません。

イラスト作成：大塚貞男、OpenAI ChatGPT（GPT-5、画像生成機能）を用いて作成

１．背景

自閉スペクトラム症（ASD）は、社会的コミュニケーションや対人関係の難しさなどを主な特徴とする神経発達症です。その背景にある認知的な特徴を明らかにするため、これまで、写真から感情を判断する検査や、目元の写真から心の状態を読み取る「目からこころを読むテスト（Reading the Mind in the Eyes Test：RMET）」など、さまざまな社会認知検査が開発されてきました。

しかし、こうした顔写真を使った従来の検査は、実際の社会的コミュニケーションに比べて、扱われる情報が限定され、かなり単純化されています。日常の対人場面では、表情や視線だけでなく、声の調子、身振り、会話の内容、それまでのやりとりや場面の文脈など、時間とともに変化する多様な情報を組み合わせて、相手の気持ちや意図を推測する必要があります。

「映像からこころを読むテスト（Reading the Mind in Films test：RMF）」は、映画の一場面を用いて登場人物のこころの状態を推測する社会認知検査です。RMF では、時間経過を伴う動的な映像を通して、視覚と聴覚の多感覚情報が提示されます。そのため、表情や視線、身振り、セリフ、声の調子、文脈など、さまざまな社会的情報を統合する力が求められます。そのため、静止画像のみを用いる従来の検査とは異なる側面から、ASD に関連する社会認知の難しさを捉えられる可能性があります。

そこで本研究では、RMF の日本語版を作成し、ASD のある成人、一般成人、うつ病のある成人の成績を比較しました。うつ病のある人にも社会生活上の困難がみられ、自閉症スペクトラム指数を測る質問紙検査[*1]では高い得点を示す傾向がありますが、その背景にある仕組みは、ASD とは異なる可能性があります。ASD とうつ病を適切に見分けることは、それぞれへの支援方法を選択する上で重要な要素です。そこで本研究では、RMF の成績から両者の違いを捉えられるかについても検討しました。

２．研究手法・成果

本研究では、京都大学大学院医学研究科精神医学教室で実施された 2 つの研究のデータを二次解析しました。解析対象は、ASD 研究に参加した ASD のある成人 23 名、うつ病研究に参加したうつ病のある成人 40 名および一般成人 39 名の計 102 名です。

年齢、性別、知能指数[*2]を考慮した統計解析により 3 群の成績を比較したところ、ASD 群の RMF 得点は、一般群およびうつ病群のいずれと比べても有意に低いことがわかりました（図１）。一方、うつ病群と一般成人群の間には成績の違いはみられませんでした。さらに、従来の静止画像を用いた社会認知検査である RMET

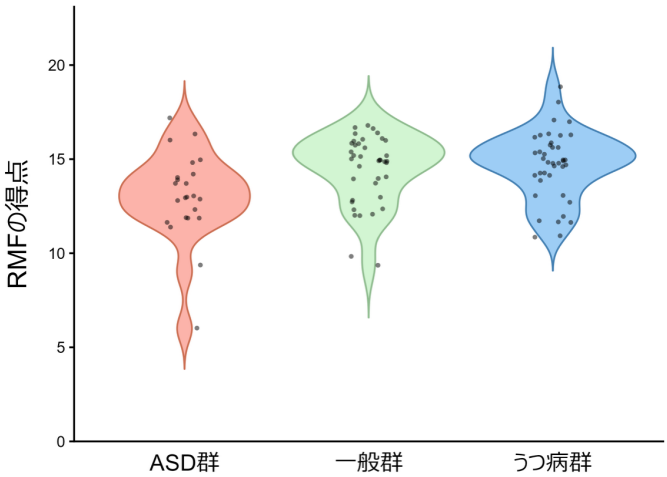


図１．各群における映像からこころを読むテスト（RMF）の成績：黒い点は各参加者の得点、色のついた図形は得点の分布を示しています。横幅が広いほど、その付近の得点をとった人が多いことを意味します。

に加えて、RMF が各群を見分けるための手がかりを提供するかを検討しました。その結果、RMF は、ASD 群と一般群、および、ASD 群とうつ病群を見分けるうえで、RMET だけでは十分に捉えられない補完的な情報をもたらしてくれることが示されました。

ASD 群において、RMF の成績と、専門家が評価した ASD 症状の重症度や、本人が回答した自閉症スペクトラム指数*[1] との間には、有意な関連はみられませんでした。一方で、RMF と RMET の成績との間には有意な正の相関がみられました。つまり、目元の写真から登場人物のこころの状態を読み取ることが難しい人ほど、映画の一場面から登場人物のこころの状態を読み取ることも難しい傾向がありました。この結果は、RMF 日本語版の社会認知検査としての構成概念妥当性*[3] を示しています。

なお、本研究の結果は、RMF だけで ASD を診断できることを示すものではありません。RMF 日本語版の心理検査としての特性や臨床的な有用性については、今後も検証を続けていく必要があります。

３．波及効果、今後の予定

本研究では、動的で多感覚的な映像を用いた RMF の日本語版を作成し、ASD に関連する社会認知の難しさを捉える可能性について検討しました。RMF は、表情や視線、身振り、セリフ、声の調子、文脈など、日常の対人場面に近い多様な情報が含まれることから、静止画像を用いた従来の検査とは異なる、生態学的妥当性*[4] の高い社会認知検査として、既存の心理検査を補完する可能性があります。

臨床実践においては、今後の検証を重ねることにより、従来の検査だけでは捉えにくかった社会認知の特徴を具体的に理解するための、有力な評価手段となる可能性があります。将来的には、ASD やうつ病、統合失調症などにおける、表面的には似ている社会生活上の困難について、その背景にある違いをとらえることに役立つ可能性があります。一人ひとりの困難が生じるメカニズムを把握し、その特徴に応じた支援方法を検討することにつながることが期待されます。

研究面では、RMF 日本語版を用いることにより、さまざまな神経発達症や精神疾患でみられる社会認知の難しさについて、共通点と相違点を比較する疾患横断的な研究が進むことが期待されます。また、異なる言語や文化圏での結果を比較することで、社会認知のどの側面が文化を超えて共通し、どの側面が文化的・言語的背景の影響を受けるのかを明らかにできる可能性があります。

４．研究プロジェクトについて

本研究は、日本学術振興会科学研究費助成金事業（18K13345「統合失調症および自閉スペクトラム症への社会認知スキルトレーニング日本版の開発」、23K22364「統合失調症と自閉スペクトラム症への社会認知トレーニングの効果増強：神経基盤の解明」）の助成を受けました。本研究は、京都大学大学院医学研究科精神医学教室が中心となり、浜松医科大学および筑波大学との共同研究として実施されました。

＜用語解説＞

*[1] 自閉症スペクトラム指数：ASD 特性（ASD にみられる行動特徴）の程度を、本人が回答する質問紙によって評価する心理検査です。50 項目から構成され、得点が高いほど ASD 特性が強いことを示します。ただし、うつ病や統合失調症など、ほかの精神疾患のある人でも得点が高くなることがあり、その場合には、精神症状に伴う社会生活上の困難が得点に反映されている可能性があります。

*[2] 知能指数：知的能力の水準を数値で表した指標です。本研究では、「日本語版成人読み能力検査（JART）」を用いて、参加者の知能指数を推定しました。JART は、50 語の漢字熟語を音読し、その正答数から、精神疾患を発症する前の知的能力を推定する検査です。

*[3] 構成概念妥当性：新しく作成した検査が、測定しようとしている能力や特徴を、想定通りに捉えている程度を指します。例えば、同じ、または関連する能力を測る既存の検査と成績が関連するか、想定される集団間の違いがみられるかなどを調べます。本研究では、RMF の成績を ASD 群、一般成人群、うつ病群の間で比較するとともに、同じく社会認知を調べる RMET の成績との関連を検討しました。

*[4] 生態学的妥当性：検査で扱う状況や、そこで得られた結果が、日常生活の状況や行動にどの程度近いかということを指します。RMF では、映画の一場面を用いて、表情、視線、身振り、セリフ、声の調子、場面の文脈など、動的で多感覚的な情報を提示します。このため、従来の静止画像を用いた検査よりも、日常の対人場面に近い社会的情報を扱う検査と考えられます。

＜研究者のコメント＞

診断や判別は、困難が生じる仕組みを理解し、それぞれに応じた支援を考えるうえで重要です。一方、教育現場や職場などでは、診断名にとらわれず、当事者の困りごとを出発点に支援を考えることも大切です。研究の知見が一人ひとりの理解と支援につながるよう、今後も地道に取り組んでいきたいと思います。（川上澄香）

ASD とうつ病などの精神疾患では、見た目には似た社会生活上の困難が生じることがありますが、その背景にあるメカニズムは同じとは限りません。こうした違いを明らかにし、一人ひとりの特徴に合った効果的な支援方法の確立につながるよう、研究を前進させていきたいと思います。（大塚貞男）

＜論文タイトルと著者＞

タイトル：The Japanese Adaptation of the Reading the Mind in Films Test: Differentiating Autism Spectrum Disorder From Depression Using an Ecologically Valid Social Cognitive Task （「映像からこころを読むテスト」日本語版：生態学的妥当性を備えた社会認知課題による自閉スペクトラム症とうつ病の判別）

著　　者：川上澄香，魚野翔太，村井俊哉，大塚貞男

掲 載 誌：*Autism Research*　　DOI：10.1002/aur.70382